シリーズ先生（20）

山形の農民群像

―「農的なるもの」への共感と憧憬と―

細貝正人

真壁仁との出会い

だいぶ古い話で恐縮だが、それは一九六六年一一月下旬頃の、雹が降るような寒い日だった。

大学二年の時の大学祭か何かの、学生の手になる自主的なイベントで、どういう理由でそうなったか全くわからないのだが、私はこの日の記念講演の講師を接待する役割を担っていた。講師は農民であり詩人でもあった、山形の真壁仁である。ややグレーがかったふさふさした髪を真ん中から分け、目を一点に見据えてひとつ一つの言葉を選ぶようにして発するしゃべり方に、そして、暖房はあったのだろうけど図書館の寒い一室で、時折垂れてくる鼻水を、顔の大きさには不釣り合いなほどの、節々の太いがっしりとした両手でチリ紙をはさんでふく姿に、私は妙に魅せられていた。したがって、農民詩人と言われた真壁の何ほどかも知らずに接待しながら、何を話したかも全く記憶にないが、後でいささか真壁を知るようになってから、大それたことをしたものだと、思い出す度に羞恥にかられたものだった。

この年の一ヶ月ほど前の一〇月、真壁は『詩の中にめざめる日本』（岩波新書）を著している。私が現在持っている変色して表紙の取れそうなそれは、一九六七年四月発行の二版だから、真壁の講演後この時初めて読んだのかもしれない。八〇余人の民衆の手になる詩が取り上げられ、それぞれの真壁の丁寧な解説と共

に読むと、詩などとは無縁な生活を送ってきた私のような者にも、一遍一遍が己の胸に届いてきたという実感を持ったものだった。

戦後の日教組のスローガンであった、あの竹本源治の「戦死せる教え児よ」も含め、のっぴきならない生活の現場からの、一人一人の個性の紡ぎ出す言葉のいちいちが、強く胸に迫ってくるような詩群である。とりわけ、木村廸夫（山形）「おはんのうた」、佐藤義則（同）「黒い空間、黄昏の村」、高木恭造（青森）「冬の月、夜明げ、百姓」に感じ入った。浜口国雄（金沢）「便所掃除」、教師の土田茂範（山形）「車勇助」、須田禎一（北海道新聞論説委員）「唇を噛みしめる」なども捨てがたい。

今、改めて冒頭の「民衆は詩人である―序にかえて―」を読み返してみると、赤の色えんぴつで傍線が引いてある箇所がある。

生活に必要な民具や、生産に必要な道具をつくった人々、そして民話とか民謡、仮面や衣装、踊りや語りものなどを考えつくり出した人々のあたまと手わざをさぐりだし、民族の文化の伝統を知ることがだいじなのは、それら表現された「もの」をとおして民衆の思考と技能の形質を学びうるからであり、創造能力の存在を確認することができるからだ。古いものを、もう一ぺんまねして作ってみたいからではない。

私は、毎日忙しく野良仕事で働く母に育てられたという記憶は薄く、もっぱら祖母と共に暮らしてきたという感が強い。祖母の畑仕事、縄綯い、腹がすいた時の味噌をまぶしたおにぎり作り、庭先でのトバ編みやアブラナの種落とし等、常に一緒だったし、寒い冬の夜はこれも祖母の作った藁布団の中で、冷たい足を祖母のやせこけた皺だらけの両腿に挟まれて抱かれて眠った。時代は違うが真壁も大正時代の幼児期、やはり祖母に素っ裸にされ祖母の背中の肌と綿入れの間に入って肩にしがみつき、「あの祖母の肌からにじんでくるぬくぬくした感覚」の中で眠った体験を語っている（『野の自叙伝』）。私は祖母の亡くなる高校二年まで、陰に陽に祖母と共にあった「農的なもの」の影響を強く受けた、といってよい。

その私にとっての「農的なもの」を敢えて言えば、まさに恐れ多くも真壁の先の一文と重なる。農を取り巻く自然、そこに働きかける農具（又は民具）、手わ

ざ、田畑の土、その香り、そこからもたらされる食（郷土食）、野良着、川（阿賀野川）、村の結、方言、信仰、その表現としての祭りや伝統芸能（民謡・踊り、神楽）等々、つまりは私にとっての昭和二〇年代から三〇年代中頃までの、当時の一年の四季折々の村の習俗そのものといっていい。真壁のこの一文に引き付けられたのは、それまでは私の中にずっと底流としてあった、体験的農の営みの総体を、こうして言葉として見事に表現してくれていたからであった。もとより真壁の言語表現の意味する「民衆の思考と技能の形質」や「創造能力」に比すべくもないが、少なくとも私の農的感覚の大方を覚醒させ代弁してくれていたようで、これだ！という思いで赤線を引いたのだった。

以来これまで、真壁の著したものは直ぐに求めて、できるだけ目を通してきた。『真壁　仁詩集』（土曜美術社）で言えば「街の百姓」や「峠」がいい。「峠は決定をしいるところだ。峠には訣別のためのあかるい憂愁がながれている。」で始まる「峠」の詩は、六〇年代末から中学校の国語教科書の教材でもあり、解りやすいということもあってか、これは誰でもが知っている。特に、多感な中学生の逡巡、動揺、不安、羞恥等の感情に対し、未来に向けての後押しがあるし、「喪失」と「訣別」の意味するものは重く、しかしそれなしでは希望も展望も持てない、また挑戦も開拓もなし得ない。しかし、ここでの「憂愁」は「あかるい」のだ。大いなる励ましの詩でもある。

三〇年ほど前に、その「峠」が刻まれた詩碑を、蔵王刈田岳の中腹に訪ねたことがある。車の通る道路から細い農道を入った、地面をびっしりとオオバコが覆っている、ひんやりした杉木立の中にあった。真壁の筆になるそれは、柔和な筆跡と自然に溶け込んでいける誘引力を持ったような、まことに味わい深い書体と構成である。建立当時は、今車で上がってきたそこからは上山市が見えていたというが、すでに鬱蒼とした杉木立がそれを拒んでいた。その時もここを訪ねて来た人の形跡もほとんどなかったようだから、今は杉もさらに天を覆い暗さを増し、葛等に覆われてしまっているのだろうか。

当時の東北芸術工科大学東北文化研究センター長赤坂憲雄（現学習院大学）を編集長に、二〇〇〇年一二月から七年間にわたり、『真壁仁研究』誌が毎年発刊されていた。つまり七号で終刊になっているこの研究

誌は、それぞれに特集を組み、講演、著作論、詩作品鑑賞、エッセイ、座談会、往復書簡等、多彩な内容で七号まで延べ四〇〇人を超える人たちが寄稿している。まさに圧巻である。己の生き続けた地域と農を不抜の拠点に、地域論、農業論、教育論、芸術文化論、詩論、平和論と、真壁が発信し続けた領域は、その蓄積の広さと深さにおいて、並ぶものを寡聞にして私は知らない。『野の教育論上・下』『野の文化論全五巻』のどれからも、多くの刺激と示唆を受けた。

真壁につながる農民群像

真壁は『地下水』という同人誌を主宰していた。研究誌の九人の編集委員のうち、木村廸夫、斎藤たきち、須貝和輔、星寛治たち四人は、みな「地下水」の同人で、真壁と同じ土や泥と格闘してきた農民たちであり、農や地域への眼差しを共有してきた仲間でもあった。余談ながら、真壁は我が旧新津市在住の、同人誌『犀』を主宰していた詩人・長崎浩（元新潟大学学長だった長崎明は甥と聞いていたが）とは、若い頃から深い交流を続けており、『犀』にも度々寄稿していた。

先にも書いたように、木村も詩人である。「おはんのうた」は、地を這うようにして働きに働いた「蚕飼い」（木村）、戦争に夫と二人の息子を奪われた過酷な人生で生涯を閉じた祖母をうたった詩だ。農業を営みながら、村や農を主題にして書いた多くの詩と文章は、農の現場の厳しさや強烈さを刻印する（『木村廸夫詩集』『百姓がまん記』など）。

星寛治は、あのワイン生産でよく知られた高畠町に在住し、有機農業による米作りと同時にリンゴ栽培も行う農民である。青年時代から青年団を組織しながら読書会や農村演劇を立ち上げ、また機関紙づくりも手掛け一〇号まで発行し、旧弊を打破し青年層に新たな息吹を吹き込んだりした（『鍬の詩 - むらの文化論 -』）。自らも詩作に励んだ。佐賀のミカン専業農家の、これも著名な山下惣一と交流が深く、二人にはそれぞれの村や農業の抱える具体的な課題を論じた往復書簡集『北の農民南の農民―ムラの現場から―』（現代評論社）がある。偶然にも東日本大震災が起きる一週間前の三月五日、現阿賀野市で二人の同じ表題での講演会が開催されたので、これはと私はそこにいそいそと出かけて行き、一番前で傾聴した。残念なことに、その二人も二〇二三年に亡くなった。

もう一人、『地下水』同人ではないが、個性的な農民が上山市に農業を営んでいる。狸森に住む佐藤藤三郎である。周知のように、佐藤はあの山びこ学校の無著成恭の教え子で、すでにしてそこに「ぼくはこう考える」と題した文章を発表し、佐藤が班長の七人のグループで「学校はどのくらい金がかかるものか」というテーマで、調査報告もしている。いずれも自分たちの生活の事実をしっかりと見つめ、そこにどんな問題があるのか、あるとすればどうしたらそれを克服できるのか、それを筋道立った文章力で説明しているものだ。もちろん、無着の生活綴り方の優れた指導があったとはいえ、佐藤たちの学習活動の質の高さに驚きを禁じ得ない。

また、佐藤と木村は、同じ上山農業高校の同級生同士で、二人はその頃から詩作に励み、お互いに切磋琢磨していた。佐藤はすでに、今日まで二〇冊余りの本を著している。

私は五年生の社会科で農業を教える時、常に佐藤の言葉が頭から離れることがなかった。例えば、このところの学校園とか米作りとか盛んで、そうした体験は子どもにとって大事な経験だが、自分にはどうも割り切れないものがある、という。「金というものとのかかわりあいのないユートピアの農業を教えたり体験させたとしても、子どもたちにはいったいなにがどう響くのであろうか。」（『まぼろしの村Ⅰ』）と疑問を呈していることだ。そうした話をぜひと、佐藤を講師に我が支部教研で「村から日本の教師に訴える」として講演してもらったことがある。

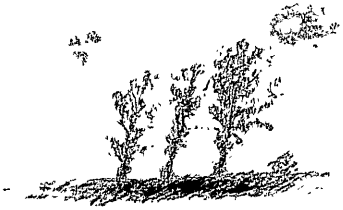
最後に、やっぱり山形の、農民ではないが農の心根を据えた国分一太郎について触れておかねばならない。さすがに生活綴り方の指導者として、文章のリズム感ある叙述、遊びや手伝いなどで、子どもたちの体験する動作や経験の仔細な観察から、その筋肉から感情の細やかな動きの一切までも、見事に説明しつくすその徹底さには、感嘆をもって合点するからだ。『しなやかさというたからもの』がそれである。国分は語っている。

学校のそとで、こどもたちは、人間のさがからもくる社会的知恵によって、生産的技術の原初的基礎を、どのようにして身につけたのであったか。社会的遺産としての、人間のしなやかさの主体における形成の回顧、ただし、いなかびとのばあい。

以下、感想は割愛し、大事な著作だけを紹介しておきたい。

私は今、受難にある日本の子どもを語る上で欠かせないものとして、国分の『しなやかさというたからもの』を、まずお勧めしたい。同じく『いなかのうまいもの』『ちちははくにのことば』（以上三点、晶文社）『ずうずうぺんぺん』（朝日新聞社）も合わせて。

（ほそがい・まさと　秋葉区）



『○月○日、区長になる女。』を見て

話題の映画が新潟で上映されないことがないよう、せっせと事務局にリクエストをしている。この映画も実はリクエストしたので、見ないわけにはいかない。

私は東京杉並区という場所に行ったことがない。荻窪、阿佐ヶ谷、高円寺という名前は聞いたことがある。映画を見たら、自然に恵まれたいいところだと思った。

その街に70年前に決まった計画にもとづいて道路建設の話がおき、住んでいる人が立ち退かなければならないという。地域の人たちの住民運動が始まり、そこへ区長選挙が。でも候補者がいない。

なんとそこに岸本聡子という女性が立候補。ＮＧＯの研究員でベルギーに住んでいた方。

杉並は原水爆禁止運動で有名なところ。でも現職も強い。なんと１８７票差で当選。

立候補した本人も勝てるとは思っていなかったという。

いま地方自治法改正案が成立し、地方自治が危機。彼女の訴えるミュニシュパリズム（地域主権主義）が発展し、この４月、女性杉並区議が半数を超えたという。日本はジェンダーギャップが１１８位で韓国や中国よりも低い。「はて？」と言いたくなる。

（伊藤）